

世界の労働関係研究所・資料館・ 図書館(11)

ノルウェーの労働資料館と労働組合中央組織

五十嵐 仁

はじめに

9月11日に起きた「米同時多発テロ」を、私はストックホルムで迎えた。事件は大きな衝撃と不安を私に与えるものだった。しかし、今さら予定を変更するわけにはいかない。さし当たり、何か不都合が生ずるまで、当初の計画通り実行することにした。

スウェーデンの次の訪問地はノルウェーである。ストックホルムからオスロまでは、列車の旅となった。早朝、6時35分発の列車に乗り込み、約6時間かけてスカンジナビア半島を横断した。

ストックホルムを出発したときに降っていた雨は上がり、乗客が次々に降りていって車内はガラガラだ。途中、人家はほとんどなく、針葉樹や白樺の森と草原が続く。時々湖が顔をのぞかせ、木々の影を湖面に映していた。

なだらかな丘の上のような畑も見えた。収穫期を迎えた麦が「黄金の秋」を演出し、黄色の列が波打っている。一部では紅葉も始まり、北欧の秋の訪れを告げていた。

オスロの街

オスロで紹介してもらったホテルは、ストックホルムの「船のYH」とは比べものにならないくらい快適だ。広さは今までの何倍もあり、

トイレとシャワー、ソファまで付いている。冷蔵庫もあって冷たい水が飲める。テレビと電話もあり、CNNが入る。

今日はノルウェーの労働運動資料・図書館を訪問することになっていたのですが、ホテルのフロントで場所を聞いた。あっけないほど簡単に分かった。このすぐ近くだ。

考えてみれば、それも当然だろう。このホテルは、そのスタッフに頼んで捜してもらった場所であり、しかも「よく使う」と言っていたのだから、近くにあつて、ホテルの従業員がよく知っているのも当たり前だ。それにしても、ここの資料・図書館は一段と駅の近くで、中心部に位置している。

少し時間があつたので、駅まで戻って、周辺を散策した。遠くに見えるのはオスロの大聖堂だ。最近ここで、ホーコン・マグヌス皇太子が4歳の子供を持つシングル・マザーと結婚式を挙げて話題をまいたそうだ。正式に結婚して同棲を解消したということで、教会もほっとしたことだろう。

駅前から帰る途中、煎餅のようなお菓子が売られているのを見つけた。スウェーデンの朝市で売られていたものと同じだ。胡麻が付いていたりして、日本の煎餅とそっくりな味がする。

これは注目すべき事実である。スウェーデンでもノルウェーでもこのようなお菓子が売ら

れ、しかも売れているということは、日本から煎餅が輸出できるということになるからだ。ただし、輸出できても、コスト面でペイするかどうかは分からないが.....。

ノルウェーの労働運動資料・図書館への訪問

労働運動資料・図書館 Labour Movement Archives and Library⁽¹⁾を訪問する約束の時間は11時だった。資料図書館の中を案内するだけでなく、お昼もご馳走していただけるということで、この時間になった。

資料・図書館が入っている建物は、Folkets Husという9階建ての立派なビルだ。Folkets Husというのは、英語でいえばPeople's Houseで、人民の家(人民会館)という意味になる。その後に聞いた話では、最初の会館は1900年に建てられたという。現在のものは、1960年代の始めに建て替えられたものだそうだ。

この中には、主な労働組合の本部や社民党本部なども入っている。すごく大きな建物だ。これまで訪れた労働関係のビルの中では一番大きいのではないだろうか。

会館の前は、フィンランドのSAKと同様に広場になっており、いくつかの店がテントを広げて朝市を開いていた。そこを抜けて近寄ると、

建物の大きさが、一層良く分かる。

屋上に、大きくLO(労働総同盟)の文字があるのが分かるだろうか。このLOという略称は、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク3国の労働組合で共通している。その上、ロゴも同じにしているようだ。そう言われれば、屋上にあるLOという文字は、一昨日に訪れたスウェーデンの本部のドア・ノブと同じ形をしている。

この3カ国に、フィンランドとアイスランドを加えた5カ国は共通性が多いため、労働組合間の連絡と協調を図る常設委員会があるそうだ。「北欧」という一つのまとまりは、私たちが考えている以上に強いものがある。

実は、北欧には、旅券同盟、議員や政党レベルでの北欧理事会、政府レベルの閣僚協議会などが存在している。労働組合側の協調関係は、これらに対応したものだといえるだろう。

この会館の5階にある受付に行くと、館長自ら待っていてくれた。この労働運動資料・図書館のクヌト・アイナー・エリクセン Kunut Einar Eriksen館長には、IALHI大会でもお会いし、大会期間中、何かと声をかけていただいた。

館長室でしばらく懇談し、隣の会議室で昼食を摂りながら、彼の秘書からもう少し詳しい話を聞いた。



人民会館のビル



エリクセン館長

(1) 労働運動資料・図書館のHPについては、http://www.arbark.no/e_index.htmlを参照。

この資料・図書館は1909年にノルウェー労働党（社民党）とLOによって設立され、今でもこの両者との関係が深い。運営資金は年間約100万ドルで、その60%はLO、30%は文化省からの補助による。その他10%という割合だ。

常勤の職員は15人で、12人が非常勤の職員だ。常勤職員は全て歴史教育の過程を経た専門家ばかりで、労働組合から来た人はいない。アカデミズムとの関連も深く、館長自身、ストックホルム大学の教授である。ノルウェー近代史についての講義をしているそうだ。

資料の棚は5キロ弱になり、書籍は10万タイトル、写真は30万点、ポスター7000枚、組合旗5000点、個人の手紙は230人分、収集資料では政治史関連に重点を置き、政治パンフでは1880年以降からのものがかなり揃っているそうだ。

この後、IALHIの大会と一緒に来ていたアイナー・ティアイエーセン Einar Terjesen さんも合流した。私が最初にEメールを出したとき、返事をくれたのは彼だった。彼の返信にはIALHI大会に館長と一緒に出席するから、詳しいことはその時相談しましょうとあった。そして、その言葉通り、最初の受付の際にすぐに彼と出会い、ホテルの相談などをして予約してもらった。IALHI大会には誰も知り合いがいないと書いたが、実は、間接的に知っている人が1人だけいたわけだ。それが彼だった。

4人で懇談しているとき、会議室にかかっている立派な旗に気がついた。写真を撮らせてもらいたいというと、この旗の展示会をウェブ・サイトで準備している最中だという。

これはスウェーデンでも同様で、こちらの旗は立派だから見栄えがする。日本ではどうだろうか。

この後、ティアイエーセンさんに書庫を案内していただいた。書庫はこの会館の地下2階にある。ここも、図書より資料の方が圧倒的に多



立派な組合旗

く、ノルウェーでは国立資料館に次ぐ規模だそうだ。文書類の資料は、全て企画化されたボックスに入っている。



案内してくれたティアイエーセンさん

このボックスも特注したものだが、このようなボックスの使用はノルウェーの他の主な資料館も同様だという。ボックス内の資料の目録はコンピュータで検索できるが、まだ完全にカードレスになっているわけではないようだ。

文書資料以外では、写真やポスター、旗、ビデオなどの資料が多く、バッジなどは多くないという。途中、珍しいものを見つけた。優勝カップのコレクションだ。

「これは何ですか？」と聞くと、企業内でのスポーツ大会で使用されたものだという。いずれも、労組によって企画されたスポーツ大会だ。

なるほど。このようなコレクションもあるわけだ。所変われば、品変わる、ということだろ

うか。



優勝カップのコレクション

ノルウェー労働総同盟への訪問

書庫の中を見せていただいた後、館長に伴われて、このビルの他の階にあるノルウェー労働総同盟Landsorganisasjonen i Norge(LO)(Norwegian Confederation of Trade Unions)の本部を訪れた。私が直接送ったEメールに返答がなかったので、資料・図書館を通じて誰かを紹介してもらえないかと頼んでおいたのだ。

インタビューに応じていただいたのは、LOの組織情報局責任者で移民労働者対策書記のアイダー・トゥールールセンEidar Trulsenさんだ。

まず、ノルウェーの経済・雇用状況について話をうかがった。このころ日本では「世界同時不況」という言い方がされていたようだが、これは日本やアメリカから見たかなり偏ったもの



トゥールールセン書記

だと思われる。

というのは、ヨーロッパはまだ概して経済状況は良好で、しかも、今回私が訪問した北欧各国はいずれも高度の社会保障と安定した経済成長を実現しているからだ。ノルウェーも例外ではない。

例外ということでは、フィンランドやスウェーデンと違って、ノルウェーは90年代最初の不況を経験せず、ずっと好調を維持してきている。その最大の要因は、北海油田と天然ガスの存在だ。

失業率は4%以下で、経済状態は大変良好だという。LOは経営者連盟と2年に一回交渉を持ち、基本協定を結んでいる。昨年5月、賃上げ交渉をめぐる過去最大のストが実施された。その結果、交渉は決着し、その後の労使関係は順調だという。

また、早くから保険と年金を組み合わせた国民総合保険システムが確立され、医療費は完全に無料化され、付き添いの費用まで負担される。トゥールールセンさんは「私も入院して手術したことがあるが、お金は一銭もかからなかった」と胸を張っていた。

さらに、教育は全て国立で無償になっている。その上、2年前の交渉で、労働者の再教育に対して国家が資金を出し、給与をもらいながら勉強することができるようにしたという。

ノルウェーの労働運動

ノルウェーの労働運動は1850年代頃から始まり、最初の組合が結成されたのは1880年頃、LOが結成されたのは1899年だ。2年前に創立100周年を迎え、盛大に祝賀の催しがなされたという。

労働党(社民党)の結成はこれよりも早い1884年で、LOと社民党は密接な協力関係にある。選挙などでも候補者を支援し、4年間で

3500万クローネの資金援助もしている。

LOは社民党と常設の協議機関を持ち、様々な問題について日常的に協議しているようだ。社民党は最近の総選挙で10%も得票を減らし、35%から25%になってしまったという。

選挙後の組閣に向けて現在協議中だそうだが、社民党が政権に加われるかどうかは微妙で、頭の痛い問題だと仰っていた。代わりに勢力を増やしたのは、保守党と、旧共産党の左翼社会党だそう。社民党は左右から挟撃された形になったようだ。

このインタビューの中で最も印象に残ったのは、組合員カードについての話だ。ノルウェーも80%という高い労働組合組織率を実現しているが、これについて話が及んだとき、「その原因は何ですか?」と聞いた。

彼は、歴史的な背景や労働運動の伝統について指摘した上で、一枚のカードを取り出した。それは、組合に入るともらえる組合員カードである。

このカードを持っていると、様々な保険に入ることができ、しかも組合員だけでなく家族にも適用されるという。民間の保険会社の10分の1の安さだとのことだ。また、このカードで色々な割引やサービスを受けることもできる。「そこにあるコンピュータだけど……」と、彼はパソコンを指さし、「このカードのお陰で20%も割引してもらったよ」。

組合員に対する保証という点でもこのカードは役に立ち、再雇用などの契約を結ぶ場合、これを持っていると有利になるようだ。この組合員カードは、様々な現実的利益を組合員に提供しており、このようなカードは他の北欧諸国でも同様に発行されているという。

これは大変耳寄りな話だ。歴史や伝統は、今すぐ導入するというわけにはいかない。しかし、このようなカード・システムは、工夫次第では

導入することは可能だろう。

日本でも、個々の組合は組合員に一定の利益を提供するシステムを導入している。それをもっと広範囲に、さらにサービスや利益の内容を豊かにし、質を高めることが検討されるべきではないだろうか。

組合の力が強いからこのようなシステムを導入できたのか、このようなシステムを導入したから組合が強くなったのか、一概には結論の出しにくい問題だが、組合員になるメリットを高めること、組合員の生活と健康、雇用を守るという点で具体的な役割を組合が果たすことが、重要なポイントではないかと思った次第だ。

エリクセン館長との会食

1時間ばかり話をうかがい、トゥールセンさんにお礼を言ってホテルに戻った。その後、ベルゲン行きの切符を購入するために中央駅まで行ったが、ここでまた問題が持ち上がった。

指定席券を買おうと思ったら全て売り切れだという。しかも、ベルゲン行きは全席指定で、自由席はないということだ。結局、11時間半のバス旅行とすることに決め、バス・ターミナルの場所を確認してホテルに戻った。

ホテルでは、資料・図書館のエリクセン館長が私を待っていてくれた。夕食を一緒にしようと誘われていたからだ。朝うかがったとき、自宅に招待したいけど改装中なので外のレストランを予約したい、については肉料理がよいか、魚料理がよいか、と聞かれた。私は、即座に「魚料理をお願いします」と答えておいた。

館長は、市庁舎裏の港に面したシーフードレストランを予約し、そこまで私を案内してくれた。雨も上がって青空が広がり、心地よい海風が吹いている。

エリクセン館長との会食は、私にとっては記念すべきものだった。たった2人での「横飯

(横文字 = 英語を話しながらの食事)」は、私にとっては初めての経験だったからだ。

多人数なら、分かるところだけで対応し、後は休むこともできるが、2人となるとそうはいかない。ご馳走していただいたのは有り難いが、疲れる食事だった。この旅が終わる頃までには、「横飯」を楽しめるようになれるだろうか。会話に気を取られ、食べている料理の味が良く分からないという状態からは脱したいものだ。

レジスタンス博物館

前日と同じように、市庁舎の裏に出た。対岸に、アーケシュフース城が見える。海からの攻撃に備えて作られた砦だそうだ。今でも大砲が残っており、衛兵が歩哨に立っている。私が近づこうとすると手で制止された。

レジスタンス博物館はこのアーケシュフース城の敷地の中にある。1966年に独立の基金として発足し、1970年5月に開館した。上に建っている建物はそれほど大きくはないが、展示場所は地下にあり、見かけよりも広いという印象だ。廊下のようになっていて、展示が続いている。

1940年4月9日、ナチス・ドイツは突如としてノルウェーに急襲をかけ、4月30日、当時の国王ハーコン7世はイギリスのロンドンに亡命する。ドイツ軍との闘いは6月まで続くが、6月9日、国王の命令でノルウェー軍はドイツに



レジスタンス博物館

降伏し、組織的な抵抗は終了した。

しかし、国王と政府はロンドンにあり、しかもイギリスとは一衣帯水の地でもある。また、中立国スウェーデンとは国境を接しており、山間部を経ての進入も不可能ではない。海や山からのレジスタンス工作員の潜入、飛行機による物資補給などに助けられ、ノルウェーのレジスタンス運動は執拗に続けられる。これに対する、ドイツ軍の取り締まりと弾圧も、過酷なものとなった。

展示は、この間の戦局の推移、ノルウェーに対する占領とそれに対する抵抗運動の展開、ゲシュタポなどによる抵抗運動への弾圧などを、占領の始まりからドイツ軍の降伏まで、時系列に沿って詳しく迎っている。

昨日、労働運動資料・図書館の書庫の中を見学したとき、黒い木箱が目に入った。「これは何ですか？」と聞くと、ロンドンの亡命政府が持ち帰ってきた重要文書の保管箱だという。主なものは、国立文書館に行ったそうだが、労働運動関係のものもあり、それをこちらに運んできた箱だというわけだ。ついでに、この占領の間、労働関係の資料はどうなったのか聞いた。

彼の答えは、政府や政党関係の資料はドイツ軍によって奪われたり破棄されたりしたが、労働運動関係の資料までは手を出さなかった、というものだった。結果的に、戦前の貴重資料もドイツの占領期間を生き抜き、何とか戦後にまで受け継がれてきたというわけだ。

この辺が戦前の貴重資料の多くが戦火で失われてしまった大原研究所と違うところだ。ドイツ軍の占領下にあったとはいえ、ノルウェーの戦前の労働運動関係資料が失われなかったのは、不幸中の幸いだったと言えるだろう。

(以下、続く)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授)